芸術の意義

まず、私にとって芸術とはという個人的な観点から話を進めようと思う。芸術といっても幅広いが、共通して言えることは私の人生にスパイスを与えてくれるものであるということだ。芸術的なコンテンツに触れた時に、自分の外側から大きな衝撃を感じ、自分を内側から形成し、私になる。その功績は不可視的だが、確かに〝ここ〟にある。

芸術は、受け取ったそれぞれの人の中で変形し、また人によって表現されるものであると感じるため、芸術そのもので存在するのではなく、人を媒介して意味をなすものであると感じる。そこに芸術の意義を見出している。たとえ受け取った人によって表現されなかったとしても、留まっているだけだとしても十分で、必ず人の内側で大切に扱われるものになる。

CHABUDAIの活動を見て

人は、生まれた環境や個性など個体差があり、それぞれの人の考え、悩みなど人の内側を理解することは難しい。しかし、それを他の人に媒介するものとして芸術が意義をもつ場合がある。自分の内側にあるものを語って共有することで可視化することができ、他のものに変化させることができるという点で、芸術は素晴らしい。そのことを再認識するきっかけとなったのがこの「CHABUDAI」で行っているプロジェクトだ。このプロジェクトは、何か悩みを抱えている人が自らの言葉で話し、その言葉をもとにアーティストが芸術作品を制作するというものだ。その貴重な体験や、その人しか感じられない気持ちの話をお聞きして、自分の生き方について考え直すきっかけとなった。出来上がった作品を見たとき、それぞれのアーティストを通すとこのように変化するのかと衝撃を受けた。作品から再び私が新しく意味を見つけ出すことができたのを覚えている。「人から人へ」影響力を持って芸術が変化していく過程を目の当たりにして、素晴らしい繋がりをここに感じた。

コロナ禍の芸術の立ち位置

新型コロナウイルスが全世界で問題となり、大きな影響をもたらしている。果たしてこの緊急事態に芸術は必要なのか。好影響をもたらすことができるのか。

緊急事態宣言発令による政府の要請では、床面積が千平方キロメートル以上の博物館・美術館などを含めた文化施設は二〇時までの営業短縮要請が出ている。しかし、東京都を中心に休業している文化施設もたくさんあるのが現状だ。このことは芸術が不要不急であることを示唆しているように感じる。

ドイツではフリーランサーや芸術家、個人業者への支援が注目されている。モニカ・グリュッタース文化相は「アーティストは今、生命維持に必要不可欠な存在」と断言。[注1]

零細企業・自営業者向けの緊急支援（経費などに充てられる）を五百億ユーロ（六兆円）芸術・文化領域に適用し、百億ユーロ（一兆二千億円）を個人の生活の保護（六カ月間の生活保護審査の緩和、住宅や暖房費、児童手当の利用など）に当て、法的措置の緩和（家賃や保険料の据え置きなど）の三つ策を芸術・文化支援として行った。[注2]

元々、国がビジネスで占めている芸術の大きさが違うという点で異なるが、新型コロナウイルスによって日本における芸術の重要性が浮き彫りにされたと感じ、重く捉えている。私は芸術が人に与える良い影響力の大きさを知っているため、もっと重要視されるべき分野であると考えている。日本の国としての規制対象になっている現状だと、生きるための行為を否定されているように感じる。しかし、私の周りには芸術に触れずに生きている人が多い。世間でも大半がそうであると知る。その生活の差から、とても生きづらく感じている。そこで、一度芸術に触れる経験があれば、魅力を知ることができる可能性が出てくる。芸術の重要性を多くの人に感じてもらうためには、このような展覧会の普及が重要になってくると感じている。芸術作品を展示する展覧会は、芸術に興味がない人にとってはハードルが高く、興味を持つことも難しいのではないかと感じる。新しい展覧会の形として、人生に関する話を聞き、そこから芸術作品を制作する「CHABUDAI」は、人生に共感を持った人が芸術作品に触れるきっかけとなる可能性があると感じる。今回はアートそのものでなく、「人から人へ」「作品から作品へ」誰かのために表現される展覧会。アーティストも一方向の表現だけでなく、双方向のフィードバックがあるという刺激的な経験となっただろう。この展覧会には人と作品による、新鮮な素晴らしさがある。

[注1]Newsweek『ドイツ政府「アーティストは必要不可欠であるだけでなく、生命維持に必要なのだ」大規模支援』
https://www.google.com/url?sa=t&rct=j&q=&esrc=s&source=web&cd=&ved=2ahUKEwjUs-zxoYjzAhUIwJQKHTYCDh8QFnoECAMQAQ&url=https%3A%2F%2Fwww.newsweekjapan.jp%2Fstories%2Fworld%2F2020%2F03%2Fpost-92928.php&usg=AOvVaw2VnRylUo1-9bBvZ8ZMbkiY（参照：11〇11年五月11十11日）

[注2]ドイツニュースダイジェスト「コロナ時代のドイツは芸術・文化をどう守るか？」
https://www.google.com/url?sa=t&rct=j&q=&esrc=s&source=web&cd=&ved=2ahUKEwjUs-zxoYjzAhUIwJQKHTYCDh8QFnoECAgQAQ&url=http%3A%2F%2Fwww.newsdigest.de%2Fnewsde%2Ffeatures%2F10946-coronakrise-kunst-und-kultur%2F&usg=AOvVaw04ew_1YmM1zofshHAFDOIW（参照：11〇11年五月11十11日）

あなたにとって芸術とは

アーティストにとって芸術はどのように捉えられているのか気になった。そこで、CHABUDAIに参加しているアーティストへのインタビューを試みた。

［インタビュー内容］

①芸術に触れたきっかけ
②芸術活動に参加する理由
③表現者として、他の方の芸術をどのように受け取っているか
④ CHABUDAIへの思い

4℃（マンガ学部 カートゥーンコース 卒業）

④のみ回答
ゲストの方のこれからの人生に対して、自分の作品で少しでも応援できたらという気持ちで描きました。誰かのために絵を描くこと自体が、なかなか経験できるものではなく、すごく貴重な機会だったと思います。このような機会がまたあれば、もっと頑張りたいです。

59（芸術学部 立体造形専攻 卒業）

①小さい頃から絵を描くのが好きで、迷路やアニメのキャラクターなどの模写を描きはじめたのがきっかけです。よく海外に行く機会があり、そこで様々なギャラリーと美術館を巡る中で、多方面からインスピレーションを受けるようになりました。
②人を笑顔にする事、自分自身そのものを表現する事。表現方法は人それぞれで、音楽が好きな人は音楽と生活をするのと同じように、僕自身は絵や立体などのアート分野に関わりながら生活を送りたいと思っています。
③その表現に対して真似をするわけではなく、特に何か特別なものを感じることは少ないと感じます。

albque（芸術学部 洋画専攻 卒業）

①絵は昔から保育園で描いていました。その中でも「オシャレ魔女♥ラブ&ベリー」にハマった時期を通して服の絵を積極的に描くようになりました。母が絵を描いていた時期があり、絵描き教室に行ったり、ミュージカルに連れて行ってもらったりしていました。
②英語のartの原義は人の為すこと、人為的なものなので、そもそも参加する・しないではなく、人を取り巻く環境こそがアートだと思っています。
③他の人の人生を垣間見るような気持ちになります。
④定期的に絵を描く機会を貰えたのがよかったと思います。

Eating（デザイン学部 イラストコース 二年）

①最初は、おばあちゃんから受けた刺激だと思います。子供の頃、おばあちゃんがよく動物を描いてくれました。正式的に触れたのは、父からもらった本。内容は一人のイラストレーターがパリへ行って美術館を回る内容でした。絵を描くのが好きだったので、絵の教室に通わせてもらい、様々な芸術に触れました。
②自分の個性や、この世界と対話したい気持ちを表現したいからです。そして芸術の価値を証明するために芸術活動に参加しています。
③自分が町の小さなところまで回ることが好きなので、プロフェッショナルな芸術家の作品から影響を受けるだけではなく、町の中、古着屋さん、パン屋さんなど、自分の好みであれば、自然的に影響を受けています。
④全体通してとても楽しかったです。いろんなゲストの語りを聞きながら、自分の経験と重なるゲストがいることを知って勇気づけられました。そして優秀なアーティスト達の作品をみて、良い刺激になり、創作意欲が強くなりました。

④ CHABUDAIのメンバーには、様々な表現者がいるので刺激になります。また、自分が今後どうなりたいかを見つける良い場所でもあると思っています。ゲストの語りは、自分が今まで感じてこなかった経験を聞く機会であったため新鮮な感覚でした。

iino（マンガ学部 カートゥーンコース四年）

①母親や祖母が絵を好きだったことが、最初に絵に触れたきっかけだと思います。中学の頃には、趣味で絵を描くようになっていました。
②日常生活でしんどかった時期が三回生の頃です。その時、自画像の絵を制作する課題が出て、それを描いた時にすっきりした感覚がありました。自分の気持ちを言葉に出すことは難しいことですが、絵の中で気持ちを出すということは、私にとってすごくシンプルなことでした。
③自分の意思を絵にして形にすることで、その作家の世界観を出すことができる表現がたくさんあったので、私自身が知らなかった表現、技術を含めて勉強になっています。
④自分が理想としている芸術とのつながりとして、このCHABUDAIが一番近いところにあります。普段の生活ではなかなか会えない方々と関わり、加えて芸術と連携がとれている点がいいなと思います。ゲストのお話は、私にとってはどれも別世界で、ニュースで聞くような内容ばかりでした。さらに、そのお話を私たちに絵として描かせてくれることは、すごくありがたく、このプロジェクトに参加できたことは、私の人生にとって非常にプラスでした。感謝しています。

jun（デザイン学部 イラストコース四年）

①小さい頃は遊びの中で、特に絵を描いたり、粘土で何か作ったりすることが自然と好きになっていった感じです。明確なきっかけはなく、いつのまにか触れていました。他にも、カーテンの裏側や机の下などの日常の中にある、区切られた狭い空間で空想したりするのが好きでした。
②描くことに関しては、自分の思いの昇華になってきたと思います。悲しい出来事があると、絵を描きます。それが一番しっくりきます。その絵のように、誰にも見せない前提で描く絵と、誰かに何かを伝えたいものだったり、コンセプトがあったりする絵の二種類あり、どちらも私にとって大切です。
③受け取る時にも、芸術に救われることがあります。素敵だと気分が上がるような芸術もあれば、その時の気分に寄り添ってくれるものもあります。
④もともと絵に救われていた部分があったので、絵と悩みや苦労とつながっている活動に参加できることが、すごく魅力的でした。このような活動が広がっていけばいいなと感じています。
一方、葛藤もありました。ゲストとして来られて、自分の苦労を話すということは、自己を開示することになるので、それに対して、自分の想いを作品に乗せ過ぎた場合、押し付けや負荷にならないかなと考えました。反対に、あまり想いを載せなかった場合、それはそれで不誠実なのではないかと考え、その塩梅がすごく難しかったです。

KIM HYUNJEONG（マンガ学部 アニメーションコース 三年）

①幼い時から両親に美術展覧会などによく連れて行ってもらい、幼少期の頃はマネ、モネ、ルノワールなど印象主義派の作家の絵が好きで、絵の具で絵を描くのが好きになり、画家になるのが夢でした。ある日、父がスタジオジブリの「となりのトトロ」を見せてくれて、そのときからアニメーションという芸術媒体にすっかりはまるようになりました。また、日本の2Dアニメーション、漫画風の絵柄のキャラクターを描くことが好きになりました。他にも、アニメ作品の登場キャラクターに感情移入をすることや、その作品の世界に私が住んでいるといたら・・・などの妄想をすることがすごく好きです。自分が考えたキャラクターの物語を動く絵で表現したいと思いながら、現在も京都精華大学で学んでいます。
②私は一人で何かを表現して自分で満足するより、友達や家族など周りの人たちに自分が作った作品を見せた後、その人たちの反応をみるのが好きです。「私が好きなこと、私の世界観をこのように表現しました！観て共感してください！私と同じ趣向の人たち集まれ！コメントやフィードバックも大歓迎！」という思いで、まるでサークル活動やコミュニティのように、楽しく周りの人たちと作品を共有しながら芸術活動に参加しています。
③自分が他の表現者の方の作品について、作品に込められている意味を深く考えてみるよりは、表現者が表現したかった意味を尊重する方で、表現媒体が絵だとしたら色覚や構成など、全体的な作品の雰囲気を大事にしています。他の表現者の方が、コメントが欲しいという場合、さり気なく自分が感じたことをお伝えするようにしています。
④実際の経験を語ってくださったゲストさんのことを思いながら、その方の気持ちになって芸術媒体に表現するという、とても貴重な経験をすることができたと思っています。また、私の芸術活動を振り返った時に、ある意味「自己中心的」だった気がしますが、「CHABUDAI」のおかげで、誰かのために制作する機会をいただき、本当に感謝しています。

MeiMei（マンガ学部 カートゥーンコース 二年）

①あまり覚えてはいないのですが、おそらく絵本がきっかけだと思います。物心がついた頃から、絵を描くことに興味があり、クレヨンで絵を描いていました。絵の塾にも行かせてもらいました。一時的に中断した時期もありましたが、最終的にまた芸術の道を選びました。
②自己鍛錬。絵を描くことで楽しくなれるからです。
③憧れもありますし、勉強にもなります。
④楽しく参加させていただきました。ゲストの方々の色々な考えに触れることができて、自分にとって良い経験になりました。

Merryan（マンガ学部 カートゥーンコース 四年）

①いつから絵を描いていたのかは覚えてないほど、とても自然に触れていました。石を使って他の石に絵を描いたり、家の机に落書きしたり、描くことができるところがあれば自由に描いていました。他にも空想することも好きでした。それから中学の頃に、母親の勧めもあって芸術高校に進学しました。
②絵を描くことに関しては、すべに誰かを幸せにはできないかもしれませんが、いつかはそうなるといいなと思いながら描いています。
③作品には作家の人生や価値観が含まれているので、その作家の考え方や、誰に会って、どんな人生を生きてきたのかを見ることができるものだと思っています。作品は作家の鏡とも言えるので、すごく興味を持って受け取っています。
④「参加できて良かった」に尽きます。ゲストのお話に自分の考えなどを少しずつ加えていき、作品を作ることができて楽しかったです。これからの創作活動に役に立つと思います。

miroku（デザイン学部 グラフィックデザインコース 二年）

①小さい頃に気が向くまま遊んでいた事が今につながっています。「表現」として意識し始めたのは、中学、高校ぐらいからで、遊びから学びに変わったという感じです。幼い頃は自分の感情とかを昇華するための道具だったが、自分から他者へ発信するものになっていきました。
②芸術を通し様々な人と関わり、その思い出を作品、形として残したいという思いで活動しています。
③同じ題材でも視点や表現方法が人によって全く違い、とても面白く、楽しいなと感じます。表現者としてまだまだ未熟で、他の方の作品は勉強になることばかりで、自分は勝手に生徒、弟子の気分で芸術を観察していることが多いです。
④私は芸術を通し、人とコミュニケーションを取り喜んでもらえるような作品を制作したいとずっと考えていたので、CHABUDAIが正にやりたい事の、ど真ん中だったため参加することができ本当に良かったなとしみじみ思います。

Ramb（人文学部 文学専攻 四年）

①私の「CHABUDAI」での表現方法は文章、特に昔話調の説話というものになります。これに触れたきっかけとなったのが、祖父母の住む地域のお坊さんのお話でした。このお坊さんがお盆の時期に各家を回り、仏壇にお経を唱えて供養されるのですが、その後に必ず法談を聞かせていただけるのです。法談なので教訓を交えたお話となっているのですが、どれも聴いている人の心を慰めるような優しさにあふれた話となっていて、それがCHABUDAIでの作品作りに活きているのだと思います。
私自身この京都精華大学に進学するまでは芸術とはあまり関りのない生活を送っていました。強いて言えば学校の授業で絵画や古典に触れた程度で、他の学生ほど芸術に触れて来ませんでした。ですが、入学以降、文学や絵画、映像作品など学内や授業の至る所で芸術と触れる機会があり、私にとって芸術に触れてきた時間は大学生活そのものと思っています。
②芸術作品を作る！という思いは抱いていません。このCHABUDAIが芸術活動としては初めての経験で、他の参加者とは違って先述したように私はかなり芸術というものに疎いです。ゲストの方々が話す内容をそのまま別のシチュエーションに置き換えて説話の形に整えるという作品制作を行いました。そのため基本的にゲストの方々がどのような体験をしてどのような思いを抱いたのか、ゲストの方々が語った表現をそのまま活かそうという思いで参加しています。
③特にTEAM CHABUDAIのメンバーに対してですが、絵や詩、映像といった言葉を使わない表現を用いる芸術表現をされている方の技術や発想には、本当に自分が参加して大丈夫なのだろうかと心配になるほど感服しています。
④苦労を抱えたゲストに対して、芸術で応援しようという発想がとても刺激的で新鮮な体験になりました。最初は興味本位でこのプロジェクトに参加しましたが、私自身の社会への無知や視野の狭さ、により社会のために何かできる事はないかと考える良いきっかけになったと考えています。私は、ゲストの方が語ったまま、それを説話の形に変える事しかできないので、それぞれ自身の得意な表現技法で表現できることは素晴らしいことだと思っています。

Reika Matsumoto（芸術学部 映像専攻 一年）

①「芸術か？」と聞かれるかもしれませんが、幼い頃から絵を描くことが好きでした。けれどももっと上手くなりたい！もっと描かなくては！と思うようになったきっかけは姉の存在でした。現在姉は全く絵を描かなくなりましたが、姉の方がずっと私より絵が上手で小学生の時には絵画の賞などもよく受賞していました。それに比べて私はあまり貰うことができなかったので、それが悔しくて「お姉ちゃんより上手くなりたい！」と勝手にライバル心を燃やしてからをきっかけに本格的に芸術に触れるようになりました。芸術鑑賞が昔から好きだったので、美術館に行ったり、展覧会によく観に行ったりしました。また、NHKで放送している日曜美術館という番組をよく観ていました。
②第一は、観てくれる人になんらかの感情を生むことができるように、と思いながら制作しています。大体は幸せになってもらえる作品を目指しています。
③作品を制作する側になると、技術面や参考のためにという思いが強くなりがちですが、まずは純粋に作品を楽しもうという思いで鑑賞することを心がけています。
④毎回新しい発見と、自分の偏った考え方に気付かされました。刺激的で、参加してよかったなと思います。

Satie（ポピュラーカルチャー学部 音楽専攻 四年）

④のみ回答
ある日、地元の友人から彼自身が抱いてきた苦しみについて聞く機会がありました。私はその時、その苦しみを芸術として昇華してみたらどうかと提案しました。彼自身の経験や感情を彼自身が表現する。なんの疑いもなくそう考えていました。しかし、必ずしも経験した本人がそれを表現しなければならないということはなく、表現を人に委ねるという方法もあるのだと思い返しました。言い換えれば人の経験や感情に触れ、それを基に表現し、ある種の代弁者のような役割を果たすという方法もあるのだと、そんな発見をCHABUDAIに参加して自分の作品に対しては、どういう意図があり、どう伝えたいのか、そう考えることが多くなりました。
今は写真がメインですが、たまに文字の持つ意味合いを深く考えながら墨で文字を書いています。小学、中学のときは、よく色ペンや色鉛筆で絵を描いていました。昔と比べて外から得る知識、情報が増えたので、それに伴って技術も含めて表現する幅が広がりました。
②作品を作り上げるまでのプロセスや社会的な役割などを考えて制作するようになりました。作品のビジュアルや理由付けを考え始めたのは大学入ってからです。悲しみや怒りなどを表現するときは、さっと描くほうが、瞬間的な感情を残しやすいと思っています。
③誰が描いたどの作品であろうと、最初は学ぶ対象として興味深く見るようにしています。見えないものをどう感じることができるか、作家の感情、環境を考えながら、背景、物語をつなげて、その作品からどれだけ多くのことを読み取れるかを大切にしています。一つの作品を見るだけでも、その時の自分の感情だったり、年齢だったりで、けっこう印象が変わったりします。元気をもらえる時もあれば、辛くなるときもあったりします。そういうところがまた面白いと思います。好きな作品としては、綺麗や上手いだけではない作品が好きです。例えば、小さい子どもが描いた絵でも、エネルギーを強く感じるものがあったりもすると思いますが、長く残っている作品などにも共通する部分だと思います。見えないものをどう伝えるかという視点は、私も作品を作る上で大事にしています。
④各回のゲストの方々、他の学生、卒業生のアーティストの皆さんと出会う縁などをいただいて、すごくありがたい気持ちです。芸術が生み出せる世界の広さを改めて実感できた機会になりました。このCHABUDAIに関わる方々とつながることでできたことで、自分の世界も広がりました。ありがとうございます。

nijiha.（芸術学部 立体造形専攻 二年）

①小さい頃から近所のお祭りなどでガラス細工を集めることが好きで、高校入学祝いで北海道旅行に行った際、ガラス工芸家のノグチミエコさんの作品に出会う機会があり、それが私の中で芸術作品に初めて触れた瞬間だなと思います。私は高校まで普通科で、私生活で芸術に触れる機会はあまりありませんでした。（ガラス作品集めはあくまで趣味だった為）
きっかけとなったのは高校二年生の時、大学受験で美術系に行きたいと決めた時です。そこからはデッサンや色彩の勉強で展示会に行くことが増え、全ての物や建物がモチーフとなる為スケッチをするようになり、そこから芸術に触れていきました。
②自己鍛錬。絵を描くことで楽しくなれるからです。
③憧れもありますし、勉強にもなります。
④楽しく参加させていただきました。ゲストの方々の色々な考えに触れることができて、自分にとって良い経験になりました。

得られたように思います。また、芸術が持つあり方や意義についても触れることができたように思います。今回、私はCHABUDAIの展覧会「沁みる百代の煩い」の楽曲を担当させていただきました。各ゲストのお話はもちろん、CHABUDAIに参加したことで色々な気づきがあり、制作時間も含め有意義な時間を過ごすことができました。ありがとうございました。

Venato（芸術学部 テキスタイル専攻二年）

①小学校の授業の時に詩を書いたのがきっかけです。自分から積極的に書くようになったのは小学六年生の時からです。
②作品においては、自身の生・性の苦しみは避けられないもので、昇華せずにはいられなかった結果生まれるものが多いです。
③作品を通して作者を見ることに加えて、自分の人生にどう活かすかという視点で見ています。例えば、詩もマンガも小説も、それらを見て読んで、人としての在り方や生活の知恵など、自分の人生に役立つものを吸収しています。
④ゲストの皆さんのお話を聞くと、すごく詩が浮かんできました。最近はあまり詩を書くことができていなかったのですが、お話を聞かせてもらい、詩を書くことが促進されたように感じます。他の人の力を借りるのもいいものだなと思いました。これまで、誰かのこと書くにしても、自分に一度取り込んでから表現していましたが、誰かを誰かのまま表現したのはCHABUDAIが初めてです。

ウエダ（デザイン学部 グラフィックデザインコース二年）

①小さい頃からお絵描きが好きでした。イラストなども描いたりしていましたが、専門的に学ぶつもりはありませんでした。中学の美術部に入った時に、一つ上の先輩がデッサンをしているところを見て、衝撃を受け、美術に興味を持つようになりました。その先輩が専門的に美術を学ぼうとされていた方で、真剣に取り組んでいる姿がすごくかっこよく見えました。中学三年の時に、顧問の先生から油絵をやってみないかと、お声をかけていただき、初めて油絵に触れ、それから専門的にやってみたいと思い、美術系の高校に進学しました。
②油絵を描いていた時は、自分が楽しいからという思いが強く、自分の中で完結するものを作っていました。高校で専攻が分かれるときに、油絵の他に彫刻、デザインなど色々あったのですが、色々考えた結果、デザインを選択しました。アートは問題提起、デザインは問題解決とよく言われますが、クライエントさんとコミュニケーションをとりながら、要望に応え、デザインを通して問題解決をしていくことの方が自分に合っていると感じたということが選択理由です。今も人とのコミュニケーションを大切にしながら、デザインで何かを良くしたり、人の刺激になったりすることを重要視しながら、サークル活動を含めて取り組んでいます。
③作家さんの努力や、かけてきた時間が透けて見える作品がすごく好きで、自分と同じことに真剣に取り組んでいる方がいることが嬉しいです。また、完全に自分も作る側の目線で見ています。どういう気持ちで作ったのか、自分だったらどうするのかなど、影響を受けます。現在取り組んでいるタイポグラフィに関しては、あこがれや感動に近い感情など、特に影響を受けていると思います。
④普通に大学に通っていても関わることがなかったかもしれない、様々なコースの学生や卒業生と同じチームに属して、同じ展覧会をするという体験は不思議な感覚です。それが非常に面白く、貴重な体験をさせていただきました。

ガロ（マンガ学部 新世代マンガコース二年）

①中学生の時の美術の時間に、友達の作品を見て感動したことがきっかけです。飲み終わって捨てられたカンを再利用して、海を表現した作品でした。中学三年の美術の時間、先生から一枚の紙を渡されました。「なんでもいいから描いてみて」と。でも、自分は才能がなく、できないと思っていたため、描きませんでした。そうすると、先生が、「何で何も描かないの?」と。「すみません。何を描けばいいかわからないです」と伝えました。次に先生は「今の感情を、線や丸で描いてみたら」と。最初はぐちゃぐちゃな絵になりました。先生が「他の人がこの絵を見たら、これは何の絵?となってしまうけど、この作品には君の感情や気持ちが入っているから、これはもう芸術作品だよ。君はできないと言ったけど、今、君は芸術作品を1枚描いたんだよ」と。この時、私にもできるかもしれないと思って、絵を描くことが楽しくなり、定期的に描くようになりました。
　絵を描けるようになりましたが、上手い人はたくさんおり、自信を持つことはできず、高校一年生のときに絵を描くのをやめました。私は絵を描くことが好きなのに、「私は絵を描くことは好きではない」と気持ちを否定するようになりました。さらに、絵が上手な人の中で、絵を描きながら幸せに生きることはできないと思うようになりました。
高校卒業後は、ゲーム制作が学べる大学に進学しました。暇な時間ができたので、窓から見える風景などを描いていました。けれど、描いては捨ての繰り返しでした。けれどある日、「これは捨てたくないな」と思うぐらいの絵を描くことができました。それを見ながら、「やっぱり自分は絵が好き。諦めることはできない」と思い、電車の中で泣いていました。その時から、自分の気持ちを否定せずに、自分が一番好きなことをしていこうと決めました。
特にマンガに興味を持っていたので、京都精華大学で学びたいと思い、日本に留学することを決めました。結局、自分に嘘をつくことができなかったのです。
②色んな人とのコミュニケーション手段になるからです。
③憧れや学びたいという思いがあります。有名な作家さん、先輩、後輩の絵を見て特にそう思います。表現方法、絵を通じて何をやりたいのかなど、すごく勉強になり、参考にしています。作品制作の矢印になってくれています。
④色んな人の人生経験を生の声で聞くことや、質問に答えてもらえるという機会は少ないです。最近は就職のために、絵を描かなければならないという思いがあり、そんな時に絵を描けてよかったです。お話を聞かせてくれたゲストさんに、プレゼントを渡すような気持ちで絵を描くことができたのは、すごく楽しかったです。

こうすけ（デザイン学部 イラストコース一年）

④のみ回答
これまでの作品づくりを振り返ると、感覚で絵を描くことがほとんどでした。しかし、今回CHABUDAIに参加して、頭を使って考えながら、イメージに基づいて絵を描くことを経験しました。これはおそらく初めての経験だったと思います。これに関しては、とても新鮮で、こういう描き方もできるのだなという新たな発見がありました。ゲストの人生をテーマにすることで、描いている最中に、これでいいのかと戸惑うこともありましたが、それも含めてチャレンジできたのではないかと思います。

スヨン（マンガ学部 キャラクターデザインコース二年）

①積極的に芸術に触れたのは中学校3年生、将来を考えた時からです。両親から「芸術系の進路はどうか」と勧められました。画塾はもちろん、家や部活動でもよく描いていたため、日常に芸術が染み込んでいました。
②芸術を通して、人にポジティブな影響を与えるように努力しています。私の作品が他の方を傷つけないように色々な方面で工夫をしています。
③どのような環境で、どのような意図を持って表現しているかを重点的に観察しています。一つのコミュニケーションの窓口と言えると思います。時間と空間を超えることができるということが芸術の魅力的な部分だと思います。
④一人のお話を一枚の絵で表現するために工夫しながら、表現者として深く考えてみるきっかけになりました。また、同じゲストのお話を聞いて制作した他のメンバーの作品を通して、色々な観点に接することができて勉強になりました。

ツナ缶（デザイン学部 イラストコース二年）

①幼稚園の頃からスケッチブックにマーカーで絵を描いており、色の組み合わせを考えることが好きでした。中学時代は美術部に入り、水彩絵具を使って絵を描いていました。高校はデザイン科に入学し、様々な分野の表現方法を学びました。

②作品を見て下さる方を楽しませたいという思いがいつもあります。
③自分の中には無い表現や色使いを見て、自分の作品に取り入れています。
④ゲストの方の実体験をもとに作品にするということで、絵に込める思いやメッセージも、普段の自分の作品より、より大きなものになったと思います。自分の表現の幅が広がった気がしています。

マホ（芸術学部 映像専攻 四年）

①幼い頃に見ていた絵本やテレビだと思います。
②縋りたいときに好きなだけ縋らせてくれるのが芸術のいいところだなぁと思います。こうしたらどうだろう、こうしたら楽しいかなどと考えるのが好きなので、その先で社会貢献等に繋がれば御の字だなと思っています。
③他の方の作品は感性を泳がせながら視差を楽しむ感覚で見ています。
④停滞していた、人と出会う新鮮さ、のようなものを毎回強く感じました。まさしくちゃぶ台で膝を突き合わせている様な…。こういったプロジェクト自体が非常にレアなものということもあり、今後も是非続いてほしいと思っています。

亜好雪（マンガ学部 カートゥーンコース三年）

①四歳の頃、長野に住んでいた時に祖父の持っていたパソコンで絵を描いていた事が最初のきっかけです。長野に居た頃は、雪が多く外で遊ぶ事が少なかった為、幼い頃から任天堂のゲームをしたり、動物の剥製を展示している博物館などに通ったりした記憶があります。現在でも大きく芸術に触れていると感じる事はゲームが大きいです。中でも『ゼルダの伝説』や『とんがり帽子と魔法の365日』という作品は大きく影響を受けています。
②現在は、「可愛い」を追求したいという思いで芸術活動に参加していますが、CHABUDAIのようなゲストの方がいる活動ではその方の心情や雰囲気をメインにしています。自分の為に描く事も芸術活動の中では大切ですが、人のために描くという事も私の中で大事にしている部分です。
③私が目指す芸術に対しては、憧れや共感などの感情を抱き、私には思いつかない、もしくは反対の作品を見ると嫉妬に近い感情を抱きます。また、絵やイラストなどの芸術より音楽に対してインスピレーションが湧くことが多いため、自分と同じジャンルの考えを参考にしすぎないようにしています。
④様々な考え方や人生を歩んできた方たちのお話を聞く中で、自分の中でこの人の生き方を参考にしたいと感じる部分や、今まで理解することの出来なかった事柄など、今後の芸術活動の参考にできる部分が多くあり、参加出来て本当に良かったです。私は今まで、人に迷惑をかけない事に重点を置くような消極的な部分がありました。ゲストの方の話を聞く中で、不器用でもどれだけ自分の環境が劣悪でも、自分らしく生きていきたいという思いを抱いている方が多く、自分の人生観や他の方に対しての感情を見直す機会になりました。

雨三 令（マンガ学部 キャラクターデザインコース三年）

①小さい頃から絵を描くことが好きでした。家族に毎日何を描いて欲しいか聞いて、コピー用紙などに落書きをしていました。いつも絵を描いており、アニメやマンガなどが好きなので、日常的に触れてきたと思います。
②制作する時に、悔いを残さないよう全力を出して、見てもらえる方に喜んでもらえたらいいなという思いで参加しています。
③その作者がどのような思いで制作したのか、自身には無い何かを受け取るようにしています。
④参加メンバーの一人一人に個性的な表現があってとても刺激的でした。沢山の人の作品を見るのが楽しく、参加して本当によかったです。

店長（マンガ学部 キャラクターデザインコース三年）

①幼い頃、父親の水墨画の描く様子をたまに見て、そこから興味が湧きました。父親に頼んで、遊び感覚で父親と一緒に水墨画の練習をしました。それが芸術に触れたきっかけだと思います。その頃から絵や、アニメなどの芸術に興味を持ち始めたと思います。
②絵を描くという技能を真面目に勉強したいと思って続けています。同時に絵を描いている時、心が穏やかになり、自分が気持ちよくなれるので、絵を描くことが好きです。
③自分が絵を描いている時、自分の考えを込めて、絵の中に描くということは時々あるので、他の方が創作する時もそうかと思います。なので、自分が他の方の作品を見る時、その作品の中の考えや、専念した部分を知りたいです。
④まず、CHABUDAIに参加して本当によかったと思います。ゲストの方々の楽しいこと、辛いことを含めた様々な経験を知ることができて、人生の勉強になり、色んなことを考えることができました。本当に素晴らしい活動だと思います。

［インタビューを終えて］

インタビューで双方向的に意見を聞くことができるのは新鮮だった。ゲストの方々のお話をお聞きした際に、様々な体験を通して物事を見ていると感じた。しかし、アーティストの方々も今の表現に至るまでの思いがあるということを、インタビューを通して知ることができた。まずインタビューを試みたきっかけとして、自分が表現することのできない分野の、完成された作品を見た時に、アーティストの方々がどこか遠い存在に感じたということがある。ゲストさんのお話を聞いて、どのように作品が完成するのか。また、どこから発想が出てくるのか。そこに第三者として関わることができて、少しでも近づくという自身のテーマを達成できたと感じている。ひとつ大きな気づきを挙げるとしたら、芸術は人の人生のためにあるということだ。他の人のため、自分のためどちらでも存在しうる。今回のようにゲストさんのための表現や、インタビュー内容であったように自分自身の成長のための表現であってもよいのだ。自分の作った作品や、他の人の作品に助けられたり、教えてもらったり、考えさせられたりする、「芸術」とはここに意義があるのではないだろうか。

記事・編集
ポピュラーカルチャー学部　ポピュラーカルチャー学科　音楽専攻　西村紬